

中野重治全集

第四卷

筑摩書房

中野重治全集第四卷

一九七七年十月二十日初版第一刷発行

著 者 中 野 重 治

発 行 者 井 上 達 三

発 行 所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑 摩 書 房

郵便番号 一〇一―九一

電話 〇三例七六五一(代表)

振替 東京六―四一―二三

印刷 株式会社精興社
製本 株式会社鈴木製本所

装釘 栃折久美子

第四卷 目次

ある楽しさ

一

後記

著者うしろ書 楽しさと摸索の時

三九三

解題

四〇一

ある楽しさ

日暮れて

ハスクヴァナ・ミシン

ある楽しさ

たくあん漬

コペンハーゲン駐在員

模型境界標

電話

うす眼

向うがわの客

知らぬ世界

貼り紙

アードレル海水浴場の写真師

プロクラスティネーション

くちなしと天道会

三 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九

帰京

二三

声帯模写

二四

中学校同級生

二六

中学校同級生

二七

河田次郎の死

二五

養子縁組

二五

眺め

三八

物質的と物理的

三六

ちりがみ交換

三六

ある楽しさ

日暮れて

「日暮れて道遠し、つてんじやないんだ。道は近いんだが、日が暮れかけちまつたんだ。どんどん暮れる……」
そう私は考えたが、これは筋が通らぬ氣もした。日は暮れる、道はまだ遠い、そういうんで話にもなる。道が近いんでは、話になつたもんじゃない。こういう文句は、ごく普通に取るのがいいので、それでこそ、皮肉や警句やなんかととはちがつた、その文句の深さつてこともわかつてくるんだろう。

そうは思つても、それでもそれはこのところ消えなかつた。

「日暮れて道遠し、つてんじやないんだ。道は近いんだが、日が暮れかけちまつたんだ。どんどん暮れる……」
「そんなら、道つてのは何なんだ。なすべきこと、つてとこだらう。そんなら、それをなせ。なしてるのか……」

「道は近きにあり」という言葉も頭にあつたが、その近いのさえ、私はなしてゐなかつた。たぶん、「道遠し」の道と、「近きにあり」の道とは、ちがつてもいるんだろう。でも、ちがつてはいても、どこかでは繋がつてゐるんだろう。とても近いのさえ、私には出来てゐなかつた。

ついさつき、私はぶらぶらと歯医者から帰るとこだつた。医者が抜くといつていた歯が、ひとりでに抜けた。前歯の挿し歯が、挿した分だけ取れて、あとに棒杭だけ残つたのが困るが、これは待つてほしい、この暮れに、歯医者通いはちよつと困るから、という話を医者にしてきて、懷中無一文のまま、何を見てもほしいとも思わず、それも、錢を持つてないので買いたくないのじやなくて、錢のあるなしにかかわらず、物を買いたい氣がそもそ

もないという状態でぶらぶらと歩いていたのだつたが、その私の前へ、ひよいと人間が停まつたので私もつい停まつた。

「あのう……」と、行きなりその男はいつた、「荻窪へ行くには、こう行つたらいいでしょうか。中央線の荻窪……」

「荻窪……」といつて私は男を見た。

男は三十二、三までの若さで、青白い顔をして、外套を着た胸へ眠つた女の子を抱いていた。ここは世田谷四丁目だつたから、私は、荻窪へ行く道をつきに甲州街道越しに頭に描いた。いつたん新宿まで出るか。玉川電車で行つて、それから……

「どの線で、あんた、行くんですか。」と私はきいた。

「いえ、歩いて行くんです。」といつて、よわよわしく男は続けた、「ここ、行けばいいでしょうか。」

方角としては、東西南北としては、それはまちがつていなかった。そこを行つて、豪徳寺へ出て、それからまっすぐ甲州街道へ出て、それから水道道路へ出て……

それはまちがつてはいなかったが、いないといつたところで仕方のないようなものだつた。それは、甲府へ歩いて行くには、こう行つたらいいでしょうかとときかれたのと、それほどちがつてもいなかった。

「いいことはいいですがね……」と私はいつた、「あすこの突きあたりを左へ曲つて、豪徳寺へ出て……」

しかし男は、行くさきさきで何べんでもきいて行くほかはないだろう。

「四時間くらいかかるでしょうか。」

「いえ、そんなにはかからないでしょう。」

男はちよつと首をさげて、そのまま、ふわ、ふわ、ふわ……と歩きだしていた。二つか二つ半くらいの女の子も入れて、男全体が影のように動いて行つたが、男は無一文で、朝めしは食つたにしても、そのあとは何も食つ

ていないとように見えた。子供も、腹をすかしたまんま弱つて眠りこけてしまつたように見える。何だろう。どうしたんだろう。どんな事情なんだろう……

こんな弱つた人間を、それも大人と子供とひと組になつたのを、この近年けつして私は見たことがなかつた。それは、生涯はじめてのものといつてもいいほどだつた。しかし男は遠ざかつて行つて、私はそのまま家が家へ歸つてしまつたのだつた。そのわが家も、ふたり向き合つて立ちどまつたところから、そうそう遠いわけではなかつた。

「それや、家^{いへ}がもちつと近かつたらな……」

私は心で言いわけもしてみたが、道が近きになかつたわけでは決してなかつたのだつた。電車賃くらいは貸してよかつたのだ。

「それはそれとして……」

そしていつでもそうのように、その男のことはそれなりにして私は出かけねばならなかつた。「いつでもそうのように——というのがガンなんだ。」と思つたが仕方はなかつた。戦後すぐの時の栄養失調、あの男はその顔いろをしていた。あれは、言葉はなくなつたが、ほんとのそれだかどうか、まだこうして実物はあるんだ。荻窪へ行くといつてたが、来たのはどこからだつたんだろう。あの子供は、オトリには見えなかつたが……知識というのとはちがつた無知で、孤独で、嘘のように不幸で、するするうつと一家心中なんかへ行つてしまふ人びとが絶えず生産されてる谷間……しかしとにかく、こうして、つぎからつぎへ、撫^なでるだけで走つて行つてしまふ私というもん。さしあたりどうするかで、年がら年じゆう、せかせかあくせくでそのまま走つて行つてしまふ。そのせかせか、あくせくで、それは、道は近いんだというその道の上のことはずなの、道の上なのか、はづれてしまつてるのか、本人にさえ霞んできてしまふ。その私へ、向う側が見えぬほどの砂ほこりがしやあつと吹きつけてきて私はガード下へ逃げた。

向う側が見えない。といつて、どこが向う側だかさえはつきりしない。ここはつまり、渋谷のターミナルつていうんか……どこをどう直すんだらう。こつち側にあつたいろんな食いの屋にバチンコ屋、靴屋、本屋、たばこ屋、そんなものがどつかへ行つちまうのかと思つたら、こわして移したり、レールでそのまま運んだりで、全部反対がわへかためてしまつた。広場がひろくはなつた。それでも、八本も九本もあるバス発着所の石畳が消えてしまつて、探すのにひと骨もふた骨も折れるうえ、掘りくりかえした跡も放りつばなし、ごろた石を並べただけで、ひろくなつただけにいつそう困つてしまふ。広場——というよりただ広さだけ、その広さいつばいに、あの厚さで砂ほこりが溜まり、それがすぐにも舞いあがつて動き、そこへ、世田谷方面からくるバスと自動車との群れが、幅の広い坂上から、坂下のこの広さへいつばいにダブつて砂ほこりをおろしてくる。手だしのできぬものとして、その下で人間がちぢむ。避けたことにもならぬガード下で、私はすぐその赤電話の男を見つけて「おや……」と思つた。

「そんなはずはない……」

そう思つても、それは田口にちがひなかつた。この前つていへばいつ会つたんだつたらう。何しに京都から出てきたんだろか。しゃべるとこの、ぶつぶつ孔のあいたところを手でふさげばいいのを、あいたほうの片耳へ指をつつこんだりして、まわりの騒音にいらだつてゐる恰好だ。と、受話器はあてたなり、外套ぶくれのからだを右にまわしたり左にまわしたりしていたその眼が、へんな横眼の方角で私をとらえたらしかつた。からだが停まり、何かまたどなつたらしかつたが、そこで電話を切つて二、三步こつちへ来る。そこへこつちから私が近寄つて行つた。

「よ……」と両方からいうところへまたどつと砂けむりがくる。自然に避けて私たちは建物の軒下をたどつた。

「時間、あるか。」とそのままの顔で田口がいう。

「うん……」

そしてその喫茶店へはいって私たちはやつとほつとした。

「何だ、腎臓でも悪いんかね。ふくれてるな。腫れぼつたいな。」と田口がいう。

「いや、腎臓は悪くないんだ。腫れぼつたいことは腫れぼつたいんだが……」と私が答える。田口からは初めてだが、人に会うごとにきかれることで、おかしくもない。歯医者でさえ、きりきり痛んできた時だけやつと駆けつける。内臓検査だの、心電図がどうかだの、「手軽な通いの人間ドック」というのが新聞にあつたなどどこでちらちら思つても、どしどし日がたつてしまつてそれなりにまた駆けだしている。

「そつちはどうなんだ。」

「おれは元氣だがね……」

しかし田口も、血色はそれほどよくない。相かわらずぶすつとしてる。この顔つきでは、高等学校の寮で誰かが詰つたことがあつた。田口は弁解した。これは生まれつきなんだ。中学からなんだ。中学のとき、体操の教師から理不尽にいじめられた。その理由がどうしてもわからなかつたのを、ある生徒がある日忠告してくれて初めて見当がついた。

「君は、氣をつけをして真面目になると、顔が人を馬鹿にしたような顔になるんだよ。それを直すといいと思うな。」

「そいつは親切から言つてくれたただけだね。おれは真面目だからな。それや、鏡なんか見て、工夫もしてみたんだよ。」

それは、氣の毒なような、おかしいような話だつた。そのまま年取つてしまつてゐる。

「何かあつたのか。」と私はきいた。

「む、あつたつてよりやあるんだ。俵だよ。」

「俵つて大きいんだろう……」

「大きいさ。上は結婚して子供もあるんだ。次ぎが大学だ。ふたりとも東京なんだ。いまそこへ電話してたんだよ。おれのほうで、時間をまちがえててね……」

「何だ、全学連か。」

「む。それもあるけどね……」といつて彼は呑みこんだ。

「それやそうと、君ア法律のこと知つてるかね。」

「法律……そつちの専門じゃないか。」

「それやそうだけれどね、帝都大学つての知つてるだろう。」

「名は知つてる。」

「あれア、元は法律専門の学校でね。それが私学で、国立と対立してるんだが……」といつてまた彼は切つた、
「君ア司法研修所つての知つてるかね。」

「知つてる。」といつて私は仙台のことを話した。松川事件の裁判のとき仙台へ行つた。あのとき若い修習生（といつたらうか）たちに会つた。

「それだよ。それがね、どうもはつきりしないんだが、困つた傾向が出てるんだ。」といつて田口は時計を見た。
「急ぐのか。」

「いや……それがね、厄介なんだ。あれは、検事、判事、弁護士なんかの卵つてわけなんだが、それがおんなしことをやるんだ。いわば対立すべきものがね……」

やはりせいいてるらしく、田口は何度も時計を見て、そのくせしやべりたいらしく、私にわかりかねるところもあつたがこんな話だつた。

大づかみにいつて、全国の修習生のうち、このところ検事志願のものが減つてきている。検事になろうつていう法律学生が、少なくなつてきてるのだ。それから、そいつちや何だが、国立大学のほうがまずは優等だ。端的

に言や、東大がいい。派閥、学閥つてことは悪いが、とにかく事実としてそれがある。その東大、国立系が、みんな判事になりたがる。判事でなければ弁護士だ。検事になりたがらん。だから、全体として言や、判事や弁護士だけふえて、検事が絶対的にも相対的にも減るつてことだ。これは、まア、病的つてことになる。ところが、帝都大学が頑張つて出てきた。ここは、検事養成大学みたいになつてゐるのだ。もともとの傾向のとこへ、それ一方の学生が集まつてきて勉強してる。大学のほうも、検事養成大学つて方針で督促してやつてゐる。「教養」つてことにも問題はあるが、とにかく広い教養とか、これも問題だが、「人間性」か、その「人間性」とか、そんなこと一切合財眼をつぶつて、予備校なみに検事にそなえてゐるんだ。そうやつて、研修所を通つて検事になつてく成績がなかなかいいんだ。全国の検事陣をこのへんで領導しようてんで、張り切つてもゐるし、実績もあげてゐる。それがそうなつてしまつた日にや、ちよつと困るんだよ……

「しかしね、私立を貶して国立を立てるつて論理じゃまずいしね。だいいち、学生は猛烈に勉強してるんだよ。マンボズボンなんかはいてゐるの、いないんだよ。」

「じゃ、あれかね、汚職も治安妨害も徹底的にやつてやろう、日本を清めるんだと考へてる連中が勉強してるつてわけか。」

「そうなんだ。だからね、学問して、正業ちゆうの正業について、名をあげて、父母に孝につてことにもなるんだ。ちよつとあぶないんだよ。純粋の岡つ引てもんが大量に出来て、それが大勢を決しそうになるつてことがありそうなんだよ。」

「それでどうするんだね。」

「それもあつて、ちよつと来たんだよ。おれは京都だけど、大学はこつちだからね。」

「それやそうと……」といつてまた彼は時計をちらつと見た、「君は最高裁のことア知つてゐるね。」
「知つてゐるよ。」

「広津氏の本は詳しく読んでもかぬ。」

「読んでるけど……」といつて、しかし相手が田口なので私はひるんだ。

「あすこで尊属殺しのがあつただろう……」

それは私も知つてたが、そのときも詳しく読まなかつたし、忘れてもいた。

「あれは多数意見で、尊属殺しはヨリ重いつてことになつたんだ。そのときの、斎藤判事の補足意見てのを知つてるかぬ。」

「知らないな。全然知らんな。」

「全然……駄目だな、そんなじゃ。」

田口の話では、それはひどい意見だつたらしい。法のもとでは平等だからといつて、尊属殺しをヨリ重く罰しないのは馬鹿で氣違ひだ。道義を解せぬものだ。鬼面ひとを欺くもので、羊頭をかかへて狗肉くにくを売るものだ。民主主義の美名のもとに、売国的な曲学きよくがく阿世論議あせいろんぎをひろげるものだ。

「文学者があれを知らなくつちや困るなア……」

やはりぶすつとした顔のままでいわれて、私は閉口した。私にしても、新聞なんか割りによく読んで、切抜きなんかもいろいろやつてるんだが、てんで整理がつかない。はさんだり、千枚通しに突きさしたりするけれど、むちやくちやになつて結局わからなくなつてしまふ。「あれは切つておいたな……」と思つても、探すときになるとどうしても出てこない。そのくせ、切抜きをやめる元氣も出ない。ばさばさ、ばさばさしてる……

「文学者つて、割りに神経に病むんだらう。法律論でなくていいんだから、やつてくれるといいんだがなア……」といつて、また田口は時計を見た、「じゃ、あれは知つてるだらう。最高裁長官の訓辞は……」

「あれは知つてるよ。」

「だけど、第一回、第二回、第三回というようにして知つてるかい。」

「いや、それや駄目だ。だけど、いつでも同じこといつてるじやないか。」

「同じことでも、それを一回いうのと、二回いうのと、三回いうのとじや、ちがうんだよ。」

私はぐうの音も出ない。

「いや、これやおれも知らないんでね、ただきくんだが、ローマ法皇が、何か回章みたいなのをまわしたの、知らないかね。」

「知らないな。何の回章だ。」

「何か、選挙のときね。——だろうと思うんだ。——共産党にや、投票するなつてのをまわしたんだ。おれ、何か新聞で読んだんだがね。いや、知らなけやいいんだ。しらべれやいいんだから。」

「あれは知つてるよ。『レールム・ノヴァールム』と、『クワドラジェモ・アンノ』……」

「ほ、知つてるかね。感心だな。あれや、しかし、ちよつと古いな。おれのいうの、いまのだよ。ヨハネス何世とかいつたな……」

また、上べだけ撫でて行くことになると思つたが仕方はなかつた。私の時間もなくなり、彼の時間もなくなつた。たぶんやはり、ヨハネス何世やらの回章のことも、手帳に印をつけたくらいで、そのままに、この私としてはなつてしまうのだろう。どこまで行つても、蓄積というものにならない……

「じや、出よう。お、お、何だ、あれ……」

店の誰かがスイッチを入れて、テレビがうつりはじめたので私たちはまた腰をおろした。午後のニュースだつた。ぱつぱつと変り、ほかの客で見にくくもある。

「何だつてえ……炭鉱失職者再教育協会創設祝賀会だつてえ。乾杯してやがら……出よう。」といつて私たちは出た。

「じや、おれア大手町だから。これから伴^{オカ}兩人に会うんだ。ははは……」とぶすつとしたなりで田口は笑つた。